



魅惑の 女子大生従姉

伊吹泰郎
挿絵／黒田晶見

立ち読み版

KTC
KILLER COMMUNICATION



Contents

目次

プロローグ	4	
第一章	突然の誘惑	10
第二章	告白と筆下ろしと	57
第三章	危ない初めて	105
第四章	育っていくアブノーマル	158
第五章	どこまでも甘い日々	206
エピローグ	242	

登場人物

Characters

水谷 大樹

(みずたに だいき)

大学合格とともにひかりの家に居候することになった青年。受験期間中にひかりとメールをやり取りして、彼女に惹かれてゆく。

鮎貝 ひかり

(あゆかい ひかり)

大樹の従姉であり、憧れの女性。陽気でサバサバした性格。悪戯っぽい面もあり、ボリュームたっぷりの乳房や太腿を見せつけたりもする。



「つああっ!？」

急所を捕らわれた瞬間、大樹の余分な考えは消滅した。

乳房は見た目以上に柔軟で、当人の手で圧されると、すかさず縦長にひしゃげて、挟んだペニスに形を合わせてくる。

きつさこそ手の愛撫に及ばないものの、ふつくらしながら重みもある不思議な感触には、別の魅力があった。優しく抱擁されているというか、赤ん坊さながらにあやされているというか。

ポリウムは充分すぎるし、艶やかな肌の内には性感帯をじっくり蒸してくる体熱もある。しかも、男根に残る先走りとひかりの汗とが混じったせいで、肌はねっとり吸い付いてもくる。

「ふ……い……つ、これ……気持ちいいっ……」

大樹はむせび泣くように訴え、

「お願いだよ……っ、このまま動いて……ほしいっ……」

自分から弄ばれることを求めた。それに応え、ひかりも微笑を浮かべる。

「ん、任せて……」

麗しい従姉は多くを口にしないまま、身体を上へ下へと揺らし出した。彼女の操る

バストは、でこぼこしたペニスの表面を絡め取るようになってくる。一部が押されて凹んでも、他のところからはみ出すようにたわむ。そのたびに、大樹へかかる暖かな質感も強くなったり弱くなったり。

少年は肉竿がこそばゆくて堪らず、張り出したカリ首にも、長々と時間をかけて痺れを練り込まれた。一瞬一瞬なら焦らされているようにも思える緩やかな触感だが、ひかりの動きに淀みがなく、乳房も絶えず貼り付いたまま離れないから、官能の疼きはピリピリと強まってくる。

我慢汁も止まらず、恥ずかしい水音は室内の隅々まで行き渡った。

気が付けば、少年の性感は否応なしに高められており。

手よりおとなしい、など大間違いだった。もはや、ペニスは微電流を流されたように痺れつばなしで、休む暇ももらえない。

少年は再び脚から力を奪われ、今やへたり込みそうなのを必死に堪えなければならなかった。だが、無理に踏ん張ろうとすれば、結果はきつとさつきと同じ。ペニスに力が入り、あつけなく昇天させられてしまう。

同じ失敗はしたくない。

「んっ……っっ！」

脚の代わりに、大樹は手を使う。上体を前へ傾け、掌を正面の髪の上に置き、辛うじて自らを支えた。

が、ひかりは毛の一本一本でさえ、軽やかだった。手がむず痒くなり、反射的に指を波打たせると、ひかりがからかうように尋ねてくる。

「あん……大樹君……撫でてくれるの？」

「そ、それは……っ」

一瞬、返事に詰まったが、ここで姿勢を戻したら、転んでしまう。

「そうだよっ」

結局、少年は虚勢を張り、ウェーブのかかった髪を本格的にまさぐるしかなかった。図らずも先ほどの希望通り、ひかりへ愛撫をすることになったのである。

だが、指先も掌も、サワサワと舐められるようだ。パイズリだけでもいつまで頑張れるか分からなかったのに、別の刺激まで上乘せされてしまった。

加えて、

「じゃあ……わたしも張り切っちゃうわね……んっ……はぁおっ」

ひかりは首を下へ曲げ、はしたなく舌を突き出す。

（嘘っ、口でもっ!!）

大樹は驚いたが、それを声にするより、従姉の動きの方が速い。

「ちゅむっ……れろれろっ……あふっ……！」

鈴口を舐められるや、官能の衝撃は爆発的に跳ね上がった。

舌の表面は唾液で滑りやすくなっていたが、それをひかりはギューギューと牡の性感帯へ押し付けてくる。加えて、熱風のような吐息も、亀頭から根元まで吹き抜けていく。

飴と鞭を使い分けるような愉悅の渦に、大樹は驚きが吹き飛んでしまった。

ひかりが上半身全体を使うため、舌先はすぐに持ち上がり、巨根から遠ざかる。だが、少年が持ち直すより先に、再び落ちてくる。今度は勢いも強まり、鈴口から裏筋にかけての広範囲を、いじめるように打ち据えてきた。

後はもう、遠慮のない往復だ。

何回目かの衝突からか、舌は亀頭の先端部、開きっぱなしになっていた鈴口をさらにこじ開けようと、上下左右へ小刻みに蠢き始めたりもする。

それが痛み混じりの痺れを、グリグリと粘膜に擦り込んだ。

（ひかりさんが舌をつ……ひかりさんの舌つ……舌で俺のを舐めてるっ！）

やつと実感を伴ってくるが、身体の方は刺激についていけない。次々と背筋を駆け

上ってくる愉悦に、頭は破裂寸前。目の前では白い星が瞬く。

カウパー氏腺液も、止め処なく溢れていた。

そのネバつきをひかりは嬉々としてねぶり、さっきのビールよりずっと美味しそうに嘔下する。

「んぐっ……ごくんっ……んうはっ……ああ……っ！」

排泄器官から出たものが、彼女の喉を滑り落ちていく――。

大樹はひかりの顔だけでなく、体内まで汚している気分になってきた。

もつとも、直後には粘り気を増した舌が戻ってきて、逆に自分の方が、尿道の奥まで侵略されそうに思えてしまう。

我慢汁は亀頭裏の溝を通り、下へもこぼれていた。そして、律動を繰り返す美乳に触れるや、谷間へもペニスへも塗りたくられる。こちらは精液が乾くのを防いだ上、パイズリの速度をさらに増すのに利用された。

「んっ……ふっ……あっ……くっ……あふっ……」

ひかりは息を弾ませながら、手コキに負けなくなったハイペースで、逸物の皮を伸縮させる。

乳房の進行方向が変わるたび、水音はヌチュクチュツ、ニチュブチュツ、と忙しく

跳ねた。そして荒波のような快楽が、亀頭もエラも締め上げる。

もう、大樹は自分のどこが感じているのか分からなかった。一箇所が激しく疼いたかと思えば、次の瞬間には別の場所が搾られる。そして、元の場所はもつときつく痺れている。

動きが激しくなりすぎたせいで、乳房とペニスの位置は時にずれかけるものの、ひかりは巧みに身体をずらし、剛直を逃がさない。そんな時、美乳はグニヤリと歪み、ゴツイ竿への圧迫が一際乱暴になる。

「ま……待ってえっ……ひかりさんっ……それっ……」

少年が悲鳴を上げかけたが、ひかりは喘ぎをかぶせて、それを遮った。

「大樹君のおちんちん……せええきの味がしてる……。んふっ……苦あい……」

苦い、と言いながらも、汗と子種にまみれた彼女の目付きは酩酊状態だ。あられもない声に続き、ペニスは突然、強引に左右へ捻られた。付け根からすっぽ抜けんばかりに振り回され、さらに上下の往復にも翻弄される。それは大樹にとって予想外。肉棒の先端が、乳房の谷間で溶かされ、形を失いそうに思えてくる。

息を飲み、歯を食いしばっても、抗いきれなかった。剛直の底へは、みるみる二度目の白濁が殺到してくる。

そこへ媚びるような声音が絡み付いた。

「大樹君……出してえ……さつきみたいなザーメン……わたしにちようだあいつ」

「あ………いつ………」

少年が答えられないうちに、ひかりは口を亀頭へ戻す。

「んちゅっ……あむっ……ほら……大樹くふうん………」

精を催促するように、先端の穴を広げにかかった。普段、外気に触れることがなく、刺激にも極端に弱い鈴口の合わせ目を、他の場所と区別なく舐めくり回すのだ。

徹底した舌遣いで、大樹の神経へは、焼け付くような衝撃が突き刺さった。しかも、連続して、ジユクジユクジユクジユクと。

出口をこじ開けられるため、子種を食い止める手段はもうない。精子はすでに竿の半ばまで来て、尿道をパンクさせそうだった。

「でっ……出るよ!! ひかりさんっ……またっ……顔に出しちゃうよっ!!」

少年の叫びも、質問というよりは、念押しだ。

一回、顔射をやってしまった以上、すでに良識など歯止めにならない。お預けと言われても、イクのを先延ばしになどできそうにない。

ひかりも期待以上の答えを吐いてくれる。



「うん……わたし……大樹君の味が大好きになっちゃったからっ……ねっ……欲しいの……欲しい欲しい……欲しい……欲しいのおっ」

直後、ハレンチな告白が真実だと裏付けるように、バストと舌先もめいっばい押し付けてきた。どちらとも火照って蕩けるような感触。加えて、濡れてグチャグチャだ。自在に形を変えながら、大樹の粘膜を包围して、上からも周りからも揉んでくる。

「ううううっ！」

決め手の喜悦と、大好きという言葉に、少年は胸のど真ん中を射抜かれた。全身が熱病めいた昂りに侵され、それらは一気に股間へ雪崩れ込む。

一段と雄々しく反り返った陰茎は、パイプリの圧迫へ反撃するように、ついに胸の間から飛び抜けた。

「はぐっ!!」

呻いたのは大樹の方だ。たわわな膨らみが性感帯の上で派手に滑ったため、摩擦熱も技巧拔きの苛烈さになったのだ。まるで神経をむき出しにされ、しかも一本残らず爪弾つまびかれたよう。

涙の浮かぶ目でひかりを見下ろせば、勢い余った彼女の乳房は、両手で押されて中央でぶつかった挙句、グニャッと潰れていた。先端でしこっていた乳首も、下から押

され、乳輪から転がり落ちてしまいそうだ。

過剰な法悦と淫靡な見世物に、大樹の人間らしい思考はまたも停止した。

残ったのはケダモノじみた本能のみ。その中で、ゲル状の子種が濁流となって外を
目指す。突っ走る勢いはひかりの舌遣いに劣らない。己の体液にまで、大樹は弱い粘
膜を剥られてしまった。

「ひくっ、ひかりさああつ……あああつ！」

泣き叫ぶ声が起爆剤となり、精液は残った距離を一気に駆け上る。そして、壊れた
噴水さながらに、鈴口から噴き上がる。

ドプッ！ ビュクッ！ ビュククッ！ ビチャアッ！

パイズリによるエクスタシーは、手コキの解放感のすさまじさをさらに超えていた。
大樹は身体中からベタつく脂汗が滲み出し、毛という毛も逆立ちそうだ。

しかも、今度はひかりの顔が一層ペニスの近くにある。

ベチャッ！ ビチャチャッ！

彼女は艶かしい舌も頬も、一瞬で不透明な白色へ染め上げられてしまった。しかも、
そこへ追い討ちのように、荒々しい三射目四射目が降りかかる。

「あつ……んううつ……はふつ……あつ……う……え……ええ……つ」

「あひいいいっ！」

喘ぎが高くなっているうちに、一方の手をひかりの股間へ走らせる。贅肉が微塵もない腹を撫で、臍を撫で、陰毛の茂みもあつさり乗り越えた先では、陰唇がぐっしょり濡れたままだった。というより、肛門を貫通されて尚、新たな蜜を溢れさせている。わざわざ具合を確かめるまでもなく、異物を受け入れる意欲に満ちていた。

(バ、バイブを使うのもっ、いいかもっ！)

今なら秘所へ道具を入れても、彼女の温もりを思う存分感じられる。こういう時にこそ、使うべきだとさえ思えた。

「ひかりさんっ……バイブっ……バイブどこにしまつてあるっ!？」

すると、ひかりはわななく顎を、パソコンラックに向ける。

「あ、あの中、よおっ！ 下の棚に隠してあつ……あるのおっ！」

「じゃあ、取りに行こうよっ！」

結合したまま聞かれた時点で、彼女だつて何をされようとしているかが分かったはずだ。それでも答えてくれたのだから――。

大樹はもう余計な質問を挟んだりせず、ペニスを前へ押し出した。さらに膝も半歩進める。

「ひいいっ！ おっ……お尻っ……お尻いいっ！ 広がっちゃううっ!!」
ペニスはすでに丸ごと入っている。後ろから強引に押されては、ひかりも前へ進むしかない。

彼女の手足は、調教された牝犬の如く、危なっかしく動き、ただでさえ不自然に開いたアヌスはその都度、逸物で右へ左へと伸ばされた。

もつとも、そんな仕打ちを受けても、ひかりはどんどん反応を艶かしくしていく。嘘や強がりではなく、愛する少年に嬲られるのが病みつきになりかけているようだ。

急所が疼くのは大樹も同じであった。ひかりが手や膝を床へつくたび、ズン、ズンと振動が伝わってきて、アヌスの締めまりもきつくなる。やがて、陰茎の振れそうな鈍痛まで、快感の一部に思えてきた。

パソコンラックへ到着した時、大樹もひかりもすっかり息が上がっていた。しかし、ひかりは片手をぎこちなく伸ばし、パイプのケースを出す。

「こ、これええ……」

「うんっ！」

大樹はケースを受け取り、中から緑色のパイプを引っ張り出した。そうする間にも、ペニスは刺激へ馴染んでいく。もはや疑いようもなく、肛門は恋人達が快樂を得るた

めの場所に成り果てていた。

「つつ……ううあおっ！」

雄たけびを上げ、大樹はひかりを抱き起こす。さらに自分の尻を後ろへ置き、膝はひかりの脚へ引つ掛けながら左右へ広げた。

自分の上にひかりを腰掛けさせる、背面座位だ。体位を変えたことで、ペニスには彼女の体重が上積みされ、結合の度合いは段違いに跳ね上がる。

「ひああああああつ！」

ひかりもしなやかな身を竦ませ、喉が張り裂けんばかりに甲高く鳴いた。

その丸見えとなった秘所へ、大樹は迷わずパイプを捻じ込む。スイッチを入れ、秘洞の奥からこぼれるモーター音を聞きながら、自分の手による出し入れも開始。蜜壺の内外を大胆に攪拌し、グチャグチャ、ブチャブチャと、ふしだらな水音を、少女趣味の部屋へ響かせる。

さらに親指はいつばいに伸ばし、陰核へかける。パイプの回転を利用し、シックスナインの時以上に責め立てた。

「はひっ……いいいいひっ！ あっ……やあああつ!! くああああんっ！」

ひかりは背中を預けるように、大樹へ寄りかかる。靴下を履いたままの爪先や踵で、

床を何度も何度も擦る。

要求するまでもなく、彼女が大股開きを維持するから、大樹も秘所で遊び放題だ。もう一方の手も胸へやり、いくらでも指がめり込みそうな柔らかい膨らみを、好き勝手に捏ね回した。

「こんなの信じられな……ああくっ!! はっ、ひううっ! 全部がっ……んああっ! 全部がすごいのおおっ! 胸もっ……おマ○コもっ……お尻もおっおおおっ!!」

クリトリスと乳首をまとめて捻られた瞬間、ひかりは太腿の裏を引き攀らせ、その弾みで腰も大きく持ち上げた。しかし、次の瞬間には足を滑らせ、大樹の下腹へしりもちをついてしまう。

排泄孔と牡の生殖器は、またも衝突。

「ひはああああああっ!!」

ひかりは美女にあるまじき悲鳴を上げるが、大樹も手が止まる。ゆっくり入るだけでも対処しきれなかった凶悪な締め付けが、一気にカリ首まで上昇し、のみならず落下もしてきたのだ。

頭をぶん殴られたような衝撃に見舞われ、大樹の全身からは、脂汗が噴出した。

だが、ひかりの中では何かが振り切れたらしい。

「わ、わたしっ……動くのっ……動くからあああああっ！」

その宣言が終わらないうちから、彼女は自分の意思で身体を上下に揺すり始める。最初、動きは壊れた人形のようにギクシャクしていた。顎も肩も、芯が折れてしまったように跳ねており——しかし、それが少しずつリズムミカルに変わっていく。

大樹も無意識のうちに、腰を浅ましくうねらせ始めた。

不安定な背面座位では、巨根を浮き沈みさせるピストンはできない。揺らす方向は前と後ろ、左と右。

とはいえ、その動きは決しておとなしいものではない。むしろ、ひかりを振り落とさんばかりに乱暴なものだ。剛直が歪みそうな愉悅に促され、大樹は転びかけた恋人を繋ぎとめるために、指を乳房へ食い込ませた。握ったパイプも、彼女の最深部へグイグイ押し込んだ。

「ぶつかっ……ああっ……ぶつかってううっ！ おちんちんとパイプっ……お腹の中でぶつかってうううっ！」

身体中を揉みくちやにされても、ひかりの律動は止まらない。胸と股間を、さらに差し出してくる。恋人の従順な痴態に、大樹の欲望は、再びサディステイックな方向へ傾いてきた。



尻を犯され、悶え狂う従姉が、どうしようもなく愛おしい。

彼女とタイミングが合うように、彼は意図して腰遣いを操作し始める。

上下に走るアヌスト、前後左右に躍るペニス。二つの異なる動きが組み合わさると、さらなる快楽を味わえた。ひかりも感じさせられた。

視認はできないが、ひかりの菊門はさつき指でやった時以上に、不自然な伸び縮みを繰り返しているのだろう。

「大樹くうんっ、わ、わたし分かるのっ！ お尻がっ……おちんちんで広がってるっで……っ！ 駄目っ……やめられないっ……これっ気持ちよすぎるううっ！」

天井知らずに高まっていくひかりのよがり声が、それを裏付ける。

もつとも、どれだけこなれても、締め付けはほとんど緩まない。動きやすくなった分、却って過激な摩擦のみが強まる。

大樹は竿の皮がよじれるのも構わず、肛門を広げ、居並ぶ腸壁も亀頭でかき回した。快楽は嵐さながら。それに心を奪われ、己が身を振り返ることもできない。

そして何かの拍子に気が付けば、巨根は内から膨張し、爆発寸前だった。

多量の精液は、まるできつい括約筋を押し退けるように、陰茎の根元へと集まってくる。

——お尻なら……中に出しても平気よね……——

従姉のかすれ声が脳裏をかすめ、大樹の欲望は最高潮に燃え上がった。

「俺っ、ひかりさんの中に出すよっ！ いっぱいつ、出すからねっ！」
腹の底から咆哮すれば、

「うんっ、出してえっ！ 大樹君のせええきでっ……お腹いっぱいにしてええっ！
わたしっ……あああっ！ 大樹君に中出しされながらイキたいのおおっ！」

恥も外聞もない、ひかりの返事。

大樹は最後の力を振り絞って、腰を振りたくった。動きはいよいよ後先考えないものとなり、アヌスを引き裂いてしまえそう。いや、ペニスの壊れるのが先かもしれない。それでも二人の悦びは止め処ない。

「気持ちいいのがっ……止まらっ、ないのおおっ！ お尻いいっ！ お尻いいっ！
っ！ 気持ちよすぎて死んじやううううううっ！ ああああおおっ！」

ひかりは身体より先に、理性の方がズタズタだった。

大樹も真性のサディストになったつもりで、女体を肉棒でほじくり続ける。両手でもメチャクチャにしてやる。

ひかりの巨乳は汗だくで、重い病にかかったよう。玩具で引っ掻き回された割れ目

も、淫熱に負けて融解しそうだ。

グチャグチャいう水音は絶え間なく、しかし少年にはそれが蜜の音なのか、腸液と自分の体液が一体になった音なのか、聞き分けられなかった。

自制心の失せた彼の股間で、精液が生き物のように沸き立つ。

(で、出るっ！ 出る出るっ！ 出るっ！)

彼はひかりへ巻きつけた両腕へ力を入れ、彼女の尻を無理やりに己の股へ押し付けた。背後からのしかかるべく、腰も丸めた。持てる力を出し切り、恋人を穿つ勢いを最大限に強める。

ズジュブブツ！

「いっ……ひはぁあっ!!」

いきなり拘束されたひかりの方は、もがくようにテニスウェア姿をくねらせた。そのせいで裏筋とエラは、引き金さながらに捻られる。

「うっ……ぎいっ!!」

突貫の刹那、猛毒さながらの痺れに侵されて、大樹は身体を隅々まで強張らせた。特に巨根は自然と鉄杭のように硬くなる。その獐猛な脈動が、白濁を腸内へ打ち上げた。

ビュルルツ！ ビュブツビュグツビュブツ！ ドビュビュビュルツ！

端はなから抑制するつもりがなかった分、跳ね狂うペニスの逞しさは、いつも以上だ。汚濁が薄い尿道粘膜を擦る力も半端ではなく、鈴口から噴き出た後は、真上に伸びる直腸を遡る。

「あおおおっ!! うっ……あああつ……あはあああつ……! ひっ……ひぐううううううっ!」

腹を征服されて、ひかりも歯止めを失ったかの如く、膣とアヌスを収縮。バイブもペニスも遠慮なしに咀嚼した。

一方、唇はいつぱいに開いて、よがり声を垂れ流す。最後に吐き出した声が『イク』だったか『死ぬ』だったかなど、判別不能だ。彼女にだって、きつと分らない。

ただし、大樹との『初体験』で、オルガスムスの壁を突き抜けたのは確かだった。どんな男も魅了する美しい肢体は、ふしだらな痙攣が止まらない。

大樹の方も力を緩められず、ペニスをひかりの中で跳ねさせる。手は乳首を押し潰すように摘んだまま、バイブをひかりの子宮口まで突き刺したままだ。

「だ……だ……君……わた……ひううっ……こ、これ以上……はあつ……」
朦朧とした彼には、ひかりの呻きがどこか遠くから聞こえるようであった。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
- ◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
来かねる場合がございませう。い場合、お手数ですが再度お問い合わせください。
- ◎二次元編集部**の愉快なBlog**も更新中!

VALKYRIE



<http://www.comic- Valkyrie.com/>

cranberry



<http://www.cran-berry.com/>

mille-feuille
ミルフィーユ



<http://www.mille-feuille.jp/>

**モバイル二次元
ドリーム**



<http://www.2d-dream.jp/>



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!